

# 同朋大学“いのちの教育”センター講座一覧

連続いのちの講座 テーマ “いのち”の教育 会場 Do プラザ 閲覧 無料

5/11(木) 16:30~18:00

## “無量寿”の世界

講師 安藤 弥 (本学 文学部 教授)

6/8(木) 16:30~18:00

## 介護をめざすミャンマーの女性たち

講師 村上逸人 (本学 社会福祉学部 准教授)

10/26(木) 16:30~18:00

## 身体感覚をとおして蘇る他力 — 心理臨床の現場から —

講師 大住 誠 (本学 社会福祉学部 特任教授)

11/9(木) 16:30~18:00

## 川端康成と「末期の眼」

講師 三川智央 (本学 文学部 専任講師)

12/7(木) 16:30~18:00

## 仏教の生死観

講師 市野智行 (本学 文学部 専任講師)

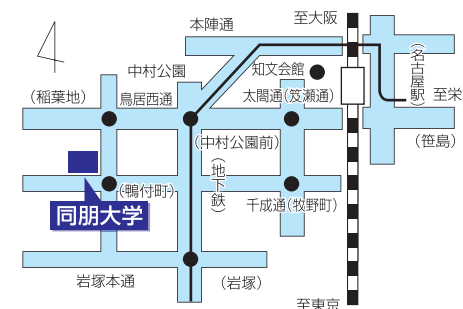
### 所 員

- センター主幹: 安藤 弥 (文学部 教授)
- 所 員: 田代 俊孝 (文学研究科 教授)
- 所 員: 木野美恵子 (社会福祉学部 教授)
- 所 員: 森村森鳳(張 偉) (文学部 准教授)
- 所 員: 石牧 良浩 (社会福祉学部 准教授)

### お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター  
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1  
☎ 052-411-1373

### 同朋大学 周辺地図



交通 市バス/栄又は笹島より②系統稲西車庫行、鴨付町下車  
地下鉄/中村公園より③系統稲西車庫行、鴨付町下車

ISSN 1340-8070



### INDEX

巻頭エッセイ	1
シリーズ(福祉にみる“いのち”⑩)	2
コラム「人間を考える」④	3
2017年度講座案内	4

同朋大学 “いのちの教育” センター  
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1  
TEL 052-411-1373  
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

### ● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

2016年度はセンター主幹が現職で逝去するという不慮の事態があり、ご心配をおかけいたしました。2017年度はセンター主幹のみ新任で再始動いたしました。これまでの活動を継承しながら、さらなる展望を模索してまいりたいと思います。本年度もどうぞ、よろしくお願いいたします。

2017.7.1 No.46

## センター主幹就任のご挨拶

安藤 弥

2017年4月よりセンター主幹となりました安藤弥と申します。おもいがけぬタイミングで重役を承ることになりました。皆様のお支えをいただきながら、せいっぱい務めてまいりたいと思いますので、どうかよろしくお願いいたします。

まず、昨年度にセンター主幹に就任されました浅野玄誠教授が任半ばでご逝去なされたことをあらためてご報告申し上げますとともに、謹んで追悼の意を表します。また、昨年度その後のセンター業務をご統括いただいた太田清史学長に感謝申し上げます。

さて、“いのちの教育”センターは1994年に設立されて以来、浄土真宗の精神のもと、「いのちとは何か」という根本的課題について、公開講座や出版というかたちで、皆様とともに学び続けてまいりました。この方針を継承しながら、今後も取り組み続けてまいりたいと思います。

本年度の連続講座1回目は「“無量寿”の世界」と題して私が担当させていただきました。まず、はかることのない、はかりしれない“いのち”

の源である阿弥陀如来の世界を『正信偈』・念仏・和讃より確かめました。次に、それがさまざまなかたちで現代社会にも響き渡っているということ、「アンパンマン」「もののけ姫」「世界に一つだけの花」「千の風になって」「花は咲く」などのフレーズを手がかりにお話しました。そして最後に、本学の建学の理念「同朋和敬」の精神を再確認しました。

連続講座は全5回開催の予定です。是非ともご参加ください。ブリッジは年2回刊行の予定です。是非ともお読みください。皆様のご参加、ご意見をお待ちしております。

(本学 文学部仏教学科 教授)



(第1回講座の様子)

## 音楽の中で“いのち”に出会う

水野 伸子

去る4月8日に、一宮市の市民講座「いのち大学」(代表：金田政実氏)で、平塚市在住の“まちの音楽家”木谷正道さんのコンサートが行われた。「自然、地域、人間・・・ばらばらになった僕たちを、もう一度つなぎなおそう」(木谷正道 H.P. より)と、長年の都庁勤務経験を経て各地の防災や震災の復興支援に奔走する木谷さんのもう一つの顔である。この「心の唄～共に生きる～」と題したコンサートに、ピアノ伴奏者としてバイオリン、ボイスパーカッション奏者と共に参加した。

イギリスの賛美歌から香港や韓国そして日本の歌謡曲まで幅広く選曲され、どれも自分や周りの人をそっと励ます静かで力強い唄が多かった。

伴奏は「先に唄い始めるので、途中から寄り添うように入ってください」など言葉で伝えられる要求や、唄の表現するダイナミクス(強弱の変化)などから唄い手の意図を読み取り、それに合うように、コード(和音)やリズムを変化させたり旋律を加えたりして、アレンジ(編曲)することから始まる。そこには、完成された楽譜を正確に弾くクラシックとは違った面白さや自由さがある。

アカペラ(無伴奏)風に唄い始める「アメイジング・グレイス」には、ジャズで使われる和声進行を用いてコードのみを響かせて色を添え、次第に単純な和声に戻し低音から高音へと駆け上がっていくアルペジオ(分散和音)で力強さと華やかさを表現しようと試みた。香港のロックバンドBEYOND(ビヨンド)の唄「遥かなる夢に」では、ブルーノート(音階の第3音、第5音、第7音を半音下げた音)を用いた旋

律をラテン系のリズムにのせて入れることにより、唄が深刻にならないよう、軽妙さを加えながら高揚感を演出した。

独自の唄の世界を作りあげようとする木谷さんと、自分のできる範囲内で編曲や演奏技法を駆使しサポートしようと試みる、このような音を介したやり取りは、楽しいながらも真剣勝負となる。木谷さんの“いのち”に向き合っていると感じる瞬間でもある。それは、唄い手との関係だけに生じるものではなく、演奏中の、他の楽器との音の重なりや駆け引き時にも、奏者の“いのち”に出会っている感覚を覚えわくわくする。

音楽は作曲者や演奏者の人となりを表すとしてしばしば言われる。確かに、表現される音色、間の取り方、ダイナミクス、全体の表現に至るまで、演奏者の考え方や、時には性格まで映し出すと感じることは多い。このように、音楽が個々の“いのち”の表現であるから、人は心を動かされるのであろう。音楽することは、その作曲者や演奏者の“いのち”に出会うことであると改めて思う。音楽とは、本来そういうものである。

本学の社会福祉学科子ども学専攻の学生は、保育士資格や幼稚園教諭免許の取得を目指して学んでいる。言葉で十分に思いを表現できない乳幼児やハンディキャップを持つ人たちの唄に“いのち”の発露を感じ、その時々<sup>つぎ</sup>の有り様に寄り添い、柔軟に対応できる音楽的感性や技術を備えた学生の育成を目指し、日々努力していきたい。

(本学 社会福祉学部社会福祉学科 教授)

## 玉手箱を開けた浦島への共感

箕浦 尚美

日本文学の授業の導入に浦島太郎の話をするところがある。童謡では「昔々浦島は助けた亀に連れられて」と歌われる誰もが知る物語であるが、亀が子供達にいじめられるのは明治以降で、亀の背に乗るのは江戸の半ば、と時代によって違いがあるからだ。古代から辿ってみれば、『日本書紀』(雄略天皇22年7月)では、浦島の釣り上げた大亀が女性に変わって浦島と夫婦となり、海に入って蓬莱山に至る。蓬莱は不老不死の仙人達の住む常世であり、仙郷訪問譚である。人々が不老不死に憧れた平安時代には『浦島子伝』のような漢文体の伝記も書かれた。12世紀末の歴史物語『水鏡』等には、浦島が戻ってきた年が天長2年(825年)と記され、長寿を得た浦島は神として祀られるようにもなった。室町期のお伽草子『浦島太郎』では、釣り上げた亀を放した翌日に、海上に現れた女性に誘われる。この頃、海の彼方の常世といえは竜宮城が優勢だったようで、行き先を蓬莱ではなく竜宮とする本が多くなる。しかし、竜宮城の主は亀ではない。そのため、竜宮の女性が亀とは別に描かれるようになり、亀の役柄も変わっていった、というようにその変遷を解釈できる(林晃平『浦島伝説の研究』(おうふう、2001

年)等参照)。

物語がこのように変化し続けてきた一方で、戻ってきた浦島が玉手箱を開けて一気に年老いてしまう点は変わらない。一般には約束を破ったことへの戒めとして教訓的に解釈されるが、開けなければ幸せだったと言い切れるだろうか。いつの時代の人々も健康で長生きすることに憧れてきたが、結局、不老不死は手に入らないものであり、本来の寿命を全うせよと言っているように思われる。神となった浦島に対し、鴨長明が「もの騒がしく箱開けし程の心に、神と跡を留め給へるは、さるべき権者などにてや有りけん。」(『無名抄』あさも川明神事)と言っているように、その聖性を疑った人は各時代にいたであろうが、それでも人々に長く親しまれてきたのは、寂しさに玉手箱を開けてしまった人間らしい愚かさが共感を呼んだためではないだろうか。『万葉集』に「常世<sup>とこよへ</sup>に<sup>つぎ</sup>住むべきものを<sup>つぎ</sup>剣大<sup>つぎ</sup>刀<sup>つぎ</sup>汝が心から鈍やこの君」とあるのも、「開けて悔しき玉手箱」という諺も、非難ではなく浦島の側に寄り添った言葉と思われる。浦島を巡る物語には、各時代の人々の様々な思いが詰め込まれている。

(本学 文学部人文学科 専任講師)